

《一》次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。）

自宅の最寄り駅から地下鉄に乗り込むと、電車の座席は微妙な空き具合であった。

寒い時期ということもあり、着膨れた乗客がみんな左右に余裕を取つて座つている。結果、混んではないが、座るには勇気のいる車両になっていた。やむを得ず、ドアの脇で立ちん坊を決め込んだ。帰宅で混み合う時間帯には、まだまだ早い午後2時頃の有楽町線のことである。

ふと目の先に、ランドセルを背負つたまま本に夢中になつて座つている小さな小学生がいるのに気が付いた。背格好からして、まだまだ低学年だということが分かつた。絵本ではなく、字のやや多い本を読んでいるように見えたので、小学校の二年生くらいであろうか。半ズボン姿のその小さな男の子は、自分が座つている席の左側に、紺色の上履き袋や工作で作つたような紙の箱を投げ出している。

私は、その子の前に立つた。すると目の前に立たれたことに気が付いたその子は、私の方をじっと見上げた。そしてめんどくさそうに荷物を自分の膝の上におもむろに置いた。

『電車の中で、他のお客さんの迷惑になるようなことは駄目だよ』

そんな目だけの会話が、どうやら通じたようだつた。私が腰掛けると、その小学生は、もうすでに本に戻つていた。一心□□に図書館のシールが貼つてあるハードカバーに顔を埋めていた。他の乗客のほとんどがスマートフォンに指を置き、①コキザミに滑らせているのに対して、なぜか、その姿は好感が持てた。荷物を投げ出すような公共マナーに反した行為を差し引いても、  
○おつりが来るほどだったのである。

何を読んでいるのだろうと好奇心がむくむく湧いたが、残念ながら角度的に表紙のタイトルを読むのは無理であった。その熱中度から、探偵ものとかではないかと推測した。私はタイトルの探索は諦め、自分の手帳を鞄から取りだし、その日のそれからの予定を確認することにした。

2、3駅が過ぎ、手帳をしまつて隣を見ると、相変わらずその半ズボンは本をにらめつけるように読んでいる。そして時折、ページをめくり、しばらくすると、また次のページをめくつていた。その様子を見るともなくぼんやり見ていると、ある瞬間、あるページのある行で目が止まつたように思えた。それまでゆっくりと顔を回転させ行を追つていたのが、びたりと動かなくなつたのである。当然ページめぐりの手も動かない。じつと同じ行を読み返しているように思えた。

すると突然、今度は、ページを今まで読んできた方に向かって、勢いよく逆にめくりだしたのである。一体何が起こつたのだ。逆に戻りながら、時々、手を止め拾い読みしたかと思うと、また勢いよくめくりだす。何かを探している、何かを探しているのだ、私はそう思えた。そして遂に、ある箇所を探り当てると、じいつと読み出した。緊迫が隣の私にも伝わってきた。そして、それまで何も発していなかつたその小学生が一言つぶやいた。

「たしかに……」

私は、吹き出しそうになつた。

何が『たしかに』なんだよ!! 何を納得したんだよ、君は!! そこまで入り込んでるわけ!!

想像するに、最初にぴたつと止まつたページには、彼が驚くような出来事が書いてあつたのである。例えば、物語の主人公が、見事な推理をしてある問題を解決した、とか。そして、その小学生は、その推理の元となつた叙述を再確認するために、数十ページ前まで慌てて遡つたのである。そして、あらためて読み直すと、そこにはある事実が隠れていたのを発見したのだった。そこで思わず、彼の口から、「たしかに……」。

そして私は、この小さな小学生に、およそ似つかわしくない「たしかに」という言葉遣いに思わず吹き出しそうになつた……。

私は、ますます、その本のタイトルを知りたくなつた。大人気ないが、私もその本を読んで、その箇所で「たしかに……」つてなりたくなつたのである。

急に、その子が立ち上がつた。降りる駅が来たのである。私の目は必死に、閉じつあるその本を追い続けた。ここで逃すとそのチャンスは永遠にない。一瞬、タイトルの一部が見えた。からうじて一部が見えたのである。そこには『ドリトル先生なんとかんとかんとか』と書かれていたのだった。

数日後、私は事務所の近くの図書館の児童文学の棚の前にいた。もちろん、あの小学生の持つていた本を見つけに来たのである。

あの小学生のように「たしかに……」つてなりたくて来たのである。でも、困つてしまつた。『ドリトル先生なんとかんとかんとか』は12冊もあつたのである。

試しにその中から『ドリトル先生月から帰る』というタイトルを手にした。しかし、目次を見ただけでは、この本のどこで手がぴたつと止まり、どこでの「たしかに……」が生まれるのか、皆目見当がつかない。『ドリトル先生と②ヒミツの湖』という「たしかに……」が生まれそうなタイトルも開けてみた。しかし、拾い読みでは分かりようがなかつた。私は全12巻を前に途方に暮れ

た。「たしかに……」は□□一夕では手に入りそうもない。やはり、最初の1行から紐解かないと無理なのであろうか。

そして、その「たしかに……」というキヨウチが安直に得られない。どうことが分かった私は、同時に、自分の中に、ある感情が横たわっていたことに気付いてしまった。いや、薄々感じていたのだが、正直言うと、気付きたくなかったのかもしれない。そして、この「たしかに……」さえ手に入れれば、それは知らなかつたものとして済ませられるのではないかという妙な期待もあつた。

では、その知りたくなかった感情とはどういうものであろうか。

私は、ドリトル先生の本が④トクティでできなかつた時、まず、自分の態度に「たしかに……」を享受する資格がないことを知らされた。それは熱中の賜である。④それだけを見つけて楽しもうなんて虫のいい話である。そしてその時、私は、あの小学生に軽い嫉妬のようなものを覚えていたのにも気付いたのであつた。嫉妬と言う言葉が激しすぎるとしたら、羨ましい気持ちと言つてもいいかもしれない。では、その羨ましさとは何か。そして、それはどこから来ているのか。

私は、あの日、地下鉄に乗つた時、いつものように移動時間を有効に使おうと、座るやいなや手帳を開いて今日の予定を確認した。そこには、いつものように出席すべき会議が⑤レツキヨされていた。その確認作業が終われば、コンピュータを開いて、来ているメールを確かめるつもりであつた。返事を求めるメールがたくさん来ているはずだ。そして、一本でも出せば、義務は減る。

私は忙しい、私の時間は埋め尽くされている。そんな時、聞こえてきたのだった、あの言葉が。「たしかに……」人間にとつて、時間は自由にならない。時間は誰に対しても平等に過ぎていく。だからこそ、時間を無駄にせず、有効に使わなくてはならない。私が電車での移動時間に手帳を開いたのも、コンピュータを開こうとしていたのも、そのためである。しかし、その時、隣に熱中がいたのである。その小さな熱中は流れゆく時間も存在している空間もなく、ただただ熱中していた。時間は誰に対しても平等に過ぎてはいなかつたのである。私は、その小学生に羨ましさを感じてしまった。その羨ましさとはどこに向かつたものだったのか。

小学生がふんだんに持つてゐる時間に對してか、それとも、あの熱中の仕方にか。

答えは分かつてゐる。しかも、その気持ちが、あの電車で半ズボン姿の小学生の隣に座つた時から始まつてゐたことも分かつてゐるのである。

(佐藤雅彦「たしかに……」)

問一 この文章にはもともと「本に熱中するあまり、お店を広げてることも忘れているのである。」という一文が含まれていて、どこに入れるのが最も適切ですか。入れる箇所の直前の五文字を答えなさい。

問二 傍線部A「小学生」のことを、筆者は「男の子」「自分」「その子」「君」「彼」以外にどう呼んでいますか。文中から二種類の呼び方を抜き出しなさい。

問三 傍線部B「一心□□」、傍線部D「□□一夕」の□に適切な漢字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

問四 傍線部C「おつりが来るほどだつた」とは、どういうことですか。七十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部E「自分の中に、ある感情が横たわっていた」とあります。それはどういう感情ですか。百字以内で説明しなさい。

問六 傍線部F「それだけを見つけて楽しもうなんて虫のいい話である」とあります。それはどういう態度に對してそう言つてゐるのですか。七十五字以内で具体的に説明しなさい。

問七 傍線部①～⑤のカタカナの語を漢字に改めなさい。

《二》次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

その日も、ツバメはお気に入りの電線から町の景色を眺めながら、明日からのことをずつと考えていました。日を重ねるごとに、毎日一步一歩、秋へと移り変わってゆくのがツバメにもひしひしと感じられました。はやく出発しなくちゃ。このところずっとそこので頭がいっぱいでした。<sup>①</sup> 気持ちは焦るのに、なかなか踏ん切りがつきません。この町を去ることについて考えれば考えるほど、ちゃんと南へ辿り着けるだろうか。新しい町が気に入らなかつたらどうしよう。それよりなにより、途中で死んじやつたらどうしよう。そんなあてどない不安がとめどなく溢れ出して、小さな心臓が張り裂けそうになつてしまふのでした。まるで一人だけちつとも飛べるようにならずに、どんどん飛べるようになつていく他の兄弟たちの背中を眺めて、途方に暮れた幼い頃のようでした。

ちゃんと別れを嘆みしめたいとかもつともらしいことを言つたって、結局は南へ行くのが怖いだけじゃないか。僕はなんてダメなんだろう。ツバメの気持ちはどんどんと暗く落ち込んでいくばかりでした。

もういつそのこと、ここで冬を越しちゃおうか……。

もう何度も出たかしれない弱気が、つい口をついて出かかつたときのことです。なにかが動いたような気がして顔を上げると、向こうに見えるビルの窓際に座つて、朝からずっと熱心に仕事をしておじさんが、突然机から体を起こしたかと思うと、大きく両腕をあげて大きなアクビをするところが見えました。ガラスの向こうで声は聞こえないはずなのに、音まで聞こえてくるような、それはそれは立派で見事なアクビでした。

大きく伸びをしてから、かけていた眼鏡を外して涙を浮かべた目をこするおじさんの姿を見て、ツバメは思わずクスクスと笑ってしまいました。そしてなんだかわからないけれどすと気が楽になつて、ふと、やっぱり明日出発しよう、と思つたのでした。あまりにも自然にそう思つたので、<sup>②</sup> ツバメは自分でもびっくりしてしまいました。だいじょうぶだよ。きっとだいじょうぶ。あのおじさんを通して、この町にそう言われたような気がしていました。

それからも日が暮れるまで、ずっとその電線の上からいつものように町を眺めて過ごしました。もうツバメは、迷つてはいませんでした。すると、どういうわけか町の景色が、思い悩んでいたさつきまでよりもずっと<sup>③</sup> 鮮やかに目に飛び込んでくることに気がつきました。学校帰りの男の子たちが五、六人、なにか叫びながら楽しそうに道路を駆け抜け抜けてゆくのが見えました。風に吹かれて、たくさん電線が同じリズムで揺れています。よく見れば、街路樹の葉っぱの色もずいぶんと茶色になりました。葉っぱが少なくなつたせいか、同じ場所から眺めていても、いつの間にかずいぶん遠くまで見渡せるようになっています。

不思議なものだとツバメは思いました。こうして改めて眺めてみると、季節が一つ巡つただけなのに、大好きだった夏のこの町と、秋になろうとしているこの町では、なんだかまるで違う町のようにも見えてくるのでした。夏の頃よりも影の色がずっと淡く、建物の輪郭が穏やかで、冷たくなつたとばかり思つていた風には、冷たさの中に慈しみがありました。午後の優しい光があちこちによきによきと建つているビルの窓ガラスに反射して、キラキラと輝いています。

ツバメはその景色をとても美しいと思いました。そしてもしかしたらこの瞬間を見ているのは世界中で自分だけなのかも知れない、という考えが頭を過つて、そんな光景を自分だけが見ることのできたといううれしさと、その美しさを誰とも分かち合えないという哀しさに挟まれて、<sup>④</sup> 閉じられた輪の中をぐるぐると永遠に飛び続けているような気分になりながら、せめてこの景色を忘れないようにしようと、目をぱちくりと大きく見開くのでした。

それにしても、なにもかもいつまでも変わらないようでいて、そこしづつ変わってゆくものだと、ツバメは思いました。僕だってついこの間までは巣の中で鳴くことしかできなかつたのに、いまはこうして電線の上で行き交う人を眺めて、明日には長い旅に出て、まだ知らない町に住むことになる。これからやつたことのないことをいっぱい経験して大人になつてゆく。でも、<sup>⑤</sup> それでも僕は、同じ僕なのだろうか。いま心を奪われた美しい瞬間や、いま考えていることを、ずっと忘れずにいることができるのだろうか。

日が沈んで、ぐつと冷え込んだ寒さに身を縮こまらせて、草の間から聞こえてくる虫の声に耳を澄ませながら、そんなことをぐるぐると考えているうちに、ツバメはいつの間にか眠つてしましました。

(クサナギシンペイ「誰も知らないツバメの話」より)

問一 波線部AとBの語句とほぼ同じ意味の語句を、それぞれ後の選択肢から選び、符号を書きなさい。

- |           |             |          |
|-----------|-------------|----------|
| A あてどない   | イ 先の見えない    | ロ とてつもない |
|           | ハ やんごとない    |          |
| B 途方に暮れた  | ハ 時間が過ぎ去つた  |          |
|           | ニ 手立てがなかつた  |          |
| ホ 抑えようのない | ホ 行方も知れなかつた |          |

問二 傍線部①「気持ばかりは焦るのに、なかなか踏ん切りがつきません」とあります。どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「ツバメは自分でもびっくりしてしまいました」とあります。どういうことにびっくりしたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「鮮やかに目に飛び込んでくる」とはどういうことですか。その説明として、次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

- イ 迷いが晴れたツバメの目には、悩んでばかりでいた先ほどまでと違い、町の一つ一つの風景が生き生きと見えるようになつた、ということ。

- ロ 明日出発しようと思えたツバメには、この町の風景が一度と見られないと思われたため、一つ一つが名残惜しく感じられた、ということ。

- ハ この町に励まされたように感じたツバメが改めてこの町の風景を見ると、あらゆる所に自分を応援してくれる町の姿があることに気づかされた、ということ。

- ニ 気持ちは楽になつたツバメが町を眺めてみると、町は既に秋になろうとしていて、その哀愁と慈愛の入り混じる様子に感動させられた、ということ。

- ホ いつもの気持ちに戻ることができたツバメの目には、いつも通りの幸せそうな町の風景が、いつもよりも実感を持って見えた、ということ。

問五 傍線部④「閉じられた輪の中をぐるぐると永遠に飛び続いているような気分」とあります。どのような気分なのですか。

その説明として、次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

- イ 町の美しさをおじさんへ教えてもらえたうれしさと、そのうれしさをおじさん自身と共有できない哀しみが繰り返し訪れて、どつちつかずの気分。

- ロ 町の風景にとらわれて苦しいような、それでいて気持ちは自由でうれしいような、矛盾する気持ちはからめとられている不思議な気分。

- ハ どうしようもない孤独の中で、永遠に自分だけにしか分からぬ気持ちはかかえて飛び続けなければならぬことに、哀しみを抱いている気分。

- ニ 美しい町の風景を独り占めできた喜びと、そのすばらしさを孤独に味わうしかない哀しみとのどちらの気持ちにも落ち着けないでいる気分。

- ホ 眼前の風景の美しさの本質が、孤独な町での生活で生まれたはかない喜びにすぎないことを知りつつ、その現実から目をそらさずいられない気分。

問六 傍線部⑤「それでも僕は、同じ僕なのだろうか」とあります。ツバメはここでどういふことを考えているのですか。七十字以内で説明しなさい。

《二》次のI・IIの間に答えなさい。

I 次の①～⑩の傍線部のカタカナの語を漢字に改めなさい。

① 細かいことについては、各自のサイリヨウに委ねられた。

② サウジアラビアはOPECのメイシユとされる。

③ フクシンの部下に裏切られ、彼は衝撃を受けた。

④ 仲人がお祝いのコウジョウを述べた。

⑤ 罪根を残さないよう、ゼンゴサクを講じる必要がある。

⑥ 昆虫をセツシャした画像を保存した。

⑦ プレゼントを赤い紙でホウソウした。

⑧ 彼の優秀さはシユウモクの一一致するところだ。

⑨ 悪友にそそのかされて、道をアヤマる。

⑩ 勝つための作戦をねる。

II 次の⑪～⑯において、下段は上段の語句の意味を示している。空欄に当てはまる適切な漢字一字を、それぞれ記しなさい。

⑪ 猫の□

|| 場所が狭いこと。

⑫ □が利く

|| わずかな兆候を、巧みに探し当てること。

⑬ □がはやい

|| 食物などが腐りやすいこと。

⑭ □がかかる

|| 強いものの庇護や影響の下にあること。

⑮ □が通う

|| 形式的・事務的ではなく、人間らしい思いやりが感じられること。

